UOU Report Vol. 16. No. 2. pp. 545～559. 1985　　연구논문집 제16권 제 2 호 pp545.～559. 1985

ことわざの中の数詞の意味

曺　喜　澈
日語日文学科
(1985. 4. 30 접수)

〈要　旨〉

ことわざは初めて聞いても原則的にその意味が理解できる場合が多い。しかし，比喩表現として「数詞」のはいっていることわざの場合はあらかじめ知らなければわかりにくい。なぜならば，それはことわざに出てくる「数詞」は象徴的なものだから，必ずしも文字どおりに受け取ってはいけないからである。

日本のことわざに出てくる「数詞」の数は実に多いばかりでなく，その種類また豊富である。ことわざでの「数詞」は数学の数と違って誇張なり強調の意味として使われる場合が大半である。またこの「数詞」は中国からの影響をかなり受けたが，現在は日本の独特のものとして根づいている。この「数詞」の意味は，さらに「助数詞」とも絡み合ってより複雑な様相を呈している。

したがって，この「数詞」の意味をよくわきまえるということは，ことわざを正しくわかるということであり，ひいては，日本の言語，文学，社会，文化などを理解するうえでの重要なかぎともなっている。

ことわざ에 나타난 数詞의 意味

曺　喜　澈
日語日文学科
(1985. 4. 30접수)

〈요　지〉

속담은 처음 들어도 그 뜻을 알 수 있는 경우가 많다. 그러나 비유표현으로서 「수사」가 들어 있는 경우는 금방 이해하기 힘든 경우가 많다. 그 이유는 「수사」가 상징적으로 사용되어 있어 문자 그대로의 의미로 해석할 수 없기 때문이다.

일본속담의 경우를 보면 「수사」가 나오는 빈도와 종류가 대단히 많다. 속담에서의 「수사」는 수학에서의 「수」와는 달리 과장 또는 강조의 뜻으로 쓰이는 경우가 대부분이다. 그리고 이 「수사」는 중국으로 부터의 영향을 많이 받았지만, 오늘날은 일본 나름대로 하나의 패턴을 형성하고 있다. 또 이 「수사」는 「조수사」와의 관련으로 더욱 복잡한 양상을 보이고 있다.

따라서 속담에서의 「수사」의 뜻을 옳게 안다는 것은 속담을 옳게 아는 것임과 동시에 일본어, 일본문학, 일본사회, 일본문화 등을 이해하는 데 중요한 포인트가 될 것이다.

I. はじめに

ことわざの起源については，従来，一人の口から始まって民衆に語り伝えられたという説や道徳教育のために作ったという説などがあるが，一般的に言われているのは，やはり，自然的に発生したという説が支配的である。したがって，ことわざの発生時期，場所，また，変遷の過程などを調べることができるものもあるが，大半は，たとえ，作者があったとしても，その民族の中にとけこんで伝えられる一つの民族的知恵の結晶であると

考えてよさそうである。

いっぽう，ことわざを表現方法から見ると，比喩表現が多い。比喩表現は，その表現と発想を関連づけて見る必要がある。たとえば，

a）発想は共通していても表現は異なるもの

b）発想も表現も異なるもの

c）発想も表現も共通しているもの

など，三つに分けることができる。この分け方は，単なる自国語同士ばかりでなく，外国語との比較においても有効である。

さて，あることわざの発想が，根本的には，同じ人間として基本的に共通している部分を持っていながらも，その民族と国家の環境，文化，習慣などの違いによって表現を異にすることが多いのである。どこの国であれ，慣用句，または，ことわざの中に出てくる比喩表現は，自然・動物・人間の性質・身体などに関するものが多いわけだが，日本のことわざで特に目立つのは，「数詞」つまり，「数」を使った比喩表現のことわざが多いというのである。

したがって，ことわざの中の「数」は比喩表現として使われているものであるから，現実の世界に存在する「数」とは，かならずしも，軌を一にするとは言えない。要するに，ことわざの「数」と，数学での「数」の意味とは相違することもあるということである。

現に，日本で使われていることわざの中では，中国の進んだ文明を学んだ時代に共に仕入れて，日本人の生活の中に培われてきた中国の表現と発想が同じであるもの，または，西洋から取り入れたが，外国のものという意識はまったくなしに，日本の固有の表現と思っていて使われているもの，さらに起源がはっきりしていないまま使われているものなどから見るように，その起源は，さまざまであろうが，すべてが，日本人に親しまれてきて日本化したものである。

それで，ことわざの中の「数」についての正しい知識を身につけるということは，ことわざの表現やエスプリを知ることになり，ひいては，日本の言語・文学・文化・社会を正確に理解することでもあろう。

本稿では，現在，日本で使われていることわざ(1)を中心にして，ことわざの中の「数詞」の種類と頻出度，各数の意味と特徴，助数詞，類諺などを通じて，日本のことわざの中の比喩的表現として使われている各「数詞」の意味を考究して見る。

Ⅱ．「数」と人間

世界最高の文字は，「数」を表すしるしから始まって次第に発達し，複雑な絵文字となり，さらに絵文字が組み合わされるようになって，完全な音節が出来，文字も幾つか生まれた(2)という。それほど古くから「数」と人間とは密接な関係があった。さらに，この「数」は量だけの概念にとどまらずことわざの中では一歩進んで，比喩の概念として使われるようになった。

ことわざの中の「数」は，日常何気なく使っている単純な数学の「数」とは違って，象徴的な意味を持っている。つまりことわざの「数詞」は，各々，それ相応の意味合いを持っているので，ほかの「数」にかえたり，または，只貫法にできている助数詞をいまふうにメートル法にかえたりすると，そのことわざは，もう本来の意味をなさなくなるのである。それはなぜならば，ことわざの意味は構成員の意味の単純な寄せ集めではないし，語と語の結び付きが極度に固定化しているからである。

たとえば，「百聞は一見に如かず」というのを，意をもっと強調するつもりで，「百」のかわりに「千」(3)または「万」に取り替えたとしよう。勿論，意味は伝えられるかも知らないが，多数の人が共通に知っていることわざ

(1) 尹井英治編，暮らしの中のことわざ辞典，集英社，1982.
(2) ベルリッツ，ベルリッツの世界言葉百科，p107，新潮選書，1983.
(3)「陳書」蕭摩訶伝には〈千聞不如一見〉というのが出ているが，現代中国語でも生きつづけているのは〈百聞不如一見〉である。

でないと使っても効果がない上に実用的意味も失われ，日本語として変な感じがするに違いない。

どこの国であろうと，ある「数詞」が比喩表現として使われるようになるまでには，いろんな理由をあげることができる。

キリスト教国では，「3」が「三位一体」ということから，神聖な意味を持っており，回教国では「5」は予言者マホメットの娘ファティマの手の指五本を連想させる数になっている。ファティマはその五本の指で眠っている父の目を蔽って日の光を遮ってあげたと言い伝えられている。(4)

日本でも「数」を「陽」と「陰」に分け，「奇数」を「陽」として尊び，「偶数」を「陰」として忌みきらう風習がある。これは古代中国の考え方が入ってきたもので，おめでたい時の贈答品などには「3，5，7」などの数字を用いている。(5)

以上のように，各民族は「数」をただ単に数字としての「数」で見るのではなく，宗教的な意味合いを持たせるとか，「数」にも一種の言霊を認めたようである。日本の場合にも，ことわざの中の「数」は，中国の陰陽五行説などの影響をたくさん受けているいっぽう，日本の風土・環境などに即した「数」の概念も段々確立して行ったのである。

それでは，とりあえず，ことわざの中に出ている「数」の種類や頻出度から各「数詞」の特性を調べて見ることにする。

Ⅲ．ことわざの中の「数詞」の種類

日本のことわざの中の「数詞」の頻出度は一言で高いというしかいいようがない。さらに，その「数詞」の種類もまた多様をきわめている。

日本語と英語のことわざの語彙調査をして上位100語の意味分野を総合雑誌と比較して見た結果，言語の違いにもかかわらず，日英のことわざの語彙の分布は多少のずれはあるものの，かなりの共通点があるように見える。

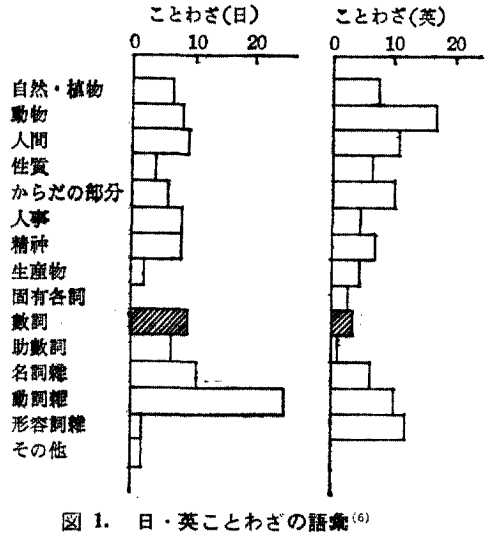

図 1.　日・英ことわざの語彙(6)

ただし，図1から見るように，ことわざの「数詞」においては，両国の間には，かなりの開きを見せている。ことわざでの日本語の「数詞」に依る表現は英語よりは，ずっと多いわけである。

(4) 前掲書，「ペルリッツの世界言葉百科」，p93.
(5) 久世善男，日本語雑学百科，p180. 新人物往来社，1978.
(6) 宮島達夫，ことわざの言語学，言語生活 124号，1962. 林大，図説日本語，p198，角川書店，1982から再引用

いっぽう，「ことわざ辞典」(7)を中心にして調べたところによると，数詞が一回以上はいっているのは，ことわざの総数約5,000項のうち，654項で，全体の一割強のことわざに数詞が一つ以上使われていることがわかる。

表 1.「数詞」のはいっていることわざ一覧表

番 号	数 詞	前	後	計	番 号	数 詞	前	後	計
1	半	18	4	22	22	39	1	・	1
2	1	185	75	260	23	40	5	・	6
3	2	37	18	55	24	50	4	3	7
4	2半	1	・	1	25	60	6	2	8
5	3	135	26	161	26	70	3	・	3
6	4	3	1	4	27	75	4	・	4
7	5	9	8	17	28	80	1	・	1
8	6	2	2	4	29	90	1	・	1
4	7	40	8	48	30	99	1	・	1
10	7半	1	・	1	31	100	42	7	49
11	8	23	19	37	32	180	1	・	1
12	9	7	1	8	33	300	3	・	3
13	10	19	18	37	34	404	2	・	2
14	15	3	1	4	35	500	2	・	2
15	16	1	・	1	36	800	3	・	3
16	17	2	・	2	37	808	4	1	5
17	18	3	・	3	38	1,000	59	12	71
18	20	2	3	5	39	3,000	1	・	1
19	25	2	・	2	40	万	11	11	22
20	30	4	1	5	41	二万	1	・	1
21	36	1	・	1	42	千万	1	・	1
							654		

なお表1のように「数詞」のはいっていることわざは多いばかりでなく，その種類もなんと42種におよぶ。この中，頻出度から見て，二百回に近く出てくる「数詞」もあればたった一回しか出てこない「数詞」も相当ある。一番出る頻度の高い「数詞」は「一」で185のことわざに出ており，百回以上出る数詞には「三」がある。また，十回以上出る「数詞」を出る頻度の高い順にあげて見ると，「一，三，千，二，百，七，八，万，五」などである。

ことわざの中の「数詞」は，一回ずつ出る「数詞」はまだしも，百回以上も出る「数詞」は，あとにつづく助数詞と結びつけて実に複雑な様相を見せている。それでは，ここで各「数詞」の意味と使い方について調べて見よう。

Ⅳ．各「数詞」の意味と用法

日本で使っていることわざのうち，42種の「数詞」が使われているというのは，各「数詞」がそれなりに意味を各々持っているということになる。それほど「数詞」が細分しているのに加わって，助数詞の如何によって意味がまたかわることがあるので，「数詞」のはいっていることわざを正しく理解するということは，実に至難のわざである。

ここでは，まず，頻出度の高いことわざを中心として，各「数詞」の意味と用法について例をあげて見る。

(7) 前掲書，「暮らしの中のことわざ辞典」。

1.〈一〉

「一」は自然数の最初の数であり，根源的な数でもある。「一」はまた，最もすぐれていること，首位，最善，最初などの意味を持っているが，ことわざでの用法は，強調表現としておもに小さい，少ない，短い，近いなどのマイナス(−)的[8]意として使われることが多い。そして「一」は単独に使われる場合もあるが，他の「数詞」と対をなすとか，または同じ「一」でも助数詞の違いでマイナス概念を表すことが多い。

a) 単独にマイナスの意を表すもの

◦**一銭**を笑う者は一銭に泣く

わずかなお金でも粗末にする人はわずかな金に困ることがある。

◦**一合**取っても武士は武士

たとえ禄はわずかでも，武士は武士としての本分や誇りがある。

◦**一葉**落ちて天下の秋を知る

物事のちょっとした前兆を見て，そのあとの大勢を察すること。

b) 助数詞の違いでマイナスの意を表すもの

◦人の**一寸**我が一尺

他人の欠点はちょっとのことでも目につくが，自分のこととなれば大きな欠点でも気がつかないものだ。

◦上り一日下り**一時**

上りは一日かかるところも，下りにはいくらもかからないこと。

◦楽は**一日**苦は一年

一日怠れば一年間も苦労せねばならないということ。

c) ほかの「数詞」と対をなしてマイナスの意を表すもの

◦**一時**違えば三里の後れ

ちょっとの間ぐずぐずしていれば，たちまち同行の者から三里ぐらいはおくれるということ。

◦**一寸**の虫にも五分の魂

小さい者や弱い者にもそれ相応の意志や考えがあるものだから，小さくても馬鹿にしてはならぬということ。

◦娘**一人**に婿八人

目当のものは一つなのに，それを欲しがる者が多すぎること。

◦**一匹**狂えば千匹の馬が狂う

群集はわずかな暗示にもたやすく動かされるということ。

ことわざでの「一」の出る回数は260回にのぼり，そのうち，a)のように「一」が単独に使われるのが186回で一番多い。その次に b)のように前句と後句両方とも「数詞」は同じく「一」でありながら，助数詞の単位の違いで，単位の小さい方がマイナス的に使われることがある。三番目が c)のように「一」が「三，五，七，八，百，千，万」などの「数詞」と対をなしてマイナスの意に使われる場合である。したがって c)の場合は前後の意味をよくくみとった上，理解しなければならない。

2.〈二〉

「二」は「一」と違って，たまにはマイナスの意として使われることもあるが，だいたいプラスの意味として使われることが多い。それは「周易」で，自然と人生のすべての現象を「陰と陽」との二元によってもろもろの事態を象徴的に見たのと関係があるだろう。「二」の用法もプラスとマイナスの意に大別してその例をあげて見る。

a) プラスの意を表すもの

◦子持ち**二人**扶持

妊婦や乳飲み子のある母親はたくさん食べるということ。

(8) 本稿では，少ない，小さい，短い，近い，軽いなどをマイナス(−)的，多い，大きい，長い，遠い重い，などをプラス(+)的概念として扱う。

◦**二階**から目薬

回り遠くて直接効果がなくすぐに役に立たないこと。

◦**二度**教えて一度叱れ

子供を教育するには，はじめはよく言い聞かせ，それでも聞かないときには叱るほうがよいということ。

◦**二束**三文

たくさんで値がひどく安いことを言う。

◦**二兎**を追う者は一兎をも得ず。(9)

同時にいろんな物事をしようと欲を出すと，どちらもうまくいかないということ。

b) マイナスの意を表すもの

◦**二間**の間で三間の槍を使う

狭い所で大きなものを使って思うように動けないこと。

3. 「三」

「三」は日本のことわざの「数詞」のなかで，使用頻度から見ては161回で「一」について第二番目を占めている。「三」は「一，五，七，九」と同じく陽の数で，天・地・人を象っためでたい数でもある。ここで「めでたい」というのは完全に出きあがっている，つまり，完成の意味を表すのでもある。

結婚式で同じ杯で新郎・新婦が酒を三度ずつ飲み，三つの杯で合計九度飲み，夫婦の約束をかためるのもこの「三，九」を神聖視するからであろう。この「三」は，洋の東西を問わず，めでたい「数」または，完成の「数」として扱っている。また，「三」はどこか神秘めいた連想を引きずる「数」でもある。

仏教でいう過去，現在，未来の「三界」，老子の「道は一を生じ，一は二(陰と陽)を生じ，二は三(陰陽と眼に見えない神気)を生じ，かくて三は万物を生ずる」(10)ということと，キリスト教での三位一体（父なる神・子なるキリスト・聖霊が一体であること），または，ヘーゲルの正・反・合という弁証法からもうかがわれる。

このほかにも「三」はプラスまたはマイナスの意のふた色に使われることが多い。したがって「三」の用法を三つに分けて見ることができる。第一は，めでたい・完成の意，第二は，プラスの意，第三は，マイナスの意になる。それでは，上記の分け方によって，「三」が具体的にどのように使われているかを具体的な例をあげて見てみよう。

a) めでたい・完成の意を表すもの

◦**三度目**の正直

一回，二回は当てにならないが，三度目となれば信じてよい。

◦**三度目**は定の目

物事は三度目がもっとも大切で，勝負事や占いをするような場合でも，一度目，二度目の結果はまだあてにならぬが，三度目であるともう確実であるということである。

◦くじは**三度**

くじを一度引いただけでは当てにならず，三度目が本当だということ。

b) プラスの意を表すもの

◦犬は三日飼えば**三年**恩を忘れぬ。

犬のようなけものさえ主人の恩を長く忘れない。

◦秋の雨が降れば猫の顔が**三尺**になる。

寒がりの猫が暖かい秋の雨を顔を長くして喜ぶ。

◦餅腹**三日**

餅は腹にもたれるということ。

---

(9) ローマのことわざ「He that hunts two hares at once will catch neither」から入ったものである。
(10) 芦田孝昭，中国の故事ことわざ，p131．社会思想社，1984.

◦一人の文珠より**三人**のたくらだ

すぐれた人が一人で考えるよりは愚かな者でも大勢集まって考え出したことのほうが勝っているということ。

◦**三度目**の飯もこわし柔かし

毎日毎日やっているよく慣れたことさえ，なかなか思うようにはいかない。

c) マイナスの意を表すもの

◦**三日**天下

わずかのあいだ，政権や実権を握ること。

◦**三歳**の翁百歳の童子

年とっても賢くない者もいれば，若いが老巧な人もいる。

◦**三寸**の舌に五尺の身を亡す。

ちょっとした失言のために，身をほろぼすから，口を慎めということ。

◦二束**三文**

たくさんで値がひどく安い。

4. 〈七〉

「七」も陽の「数」でおもにプラスの意として使われているが，たまには，マイナスの意として使われることもある。

a) プラスの意を表すもの

◦色の白いは**七**難かくす

顔かたちはいろいろの欠点があっても色が白ければ欠点があってもそれらの欠点を補える。

◦味噌豆は**七里**帰っても食え

味噌豆は遠い所から帰ってでも，食べる価値があるほどおいしくて栄養価がある。

◦一浦違えば**七浦**違う

一人の失敗が全体に悪影響をおよぼす。

◦男は閾を跨げば**七人**の敵あり

男が社会で働くのには多くの競争相手があるということ。

b) マイナスの意

◦花**七日**

盛りの短いことのたとえ

◦蟬は**七日**の寿命

命の短いもののたとえ

◦百歳の童**七**歳の翁

年はとっても子供以下の者もあれば，子供でも大人以上に知恵のすすんだ者もある。

5. 〈八〉

「や(八)」という語は，日本神話の中に極めて多く現れる「数」である。その例としては「大八州(おほやしま)，八頭(やがしら)，八門(やかど)，八十神(やそがみ)，八百万神(やおよろずがみ)」などがある。このように神話に多く用いられる数は「聖数」とも呼ばれる。多くの民族はそれぞれの聖数を持っている。

日本の場合，三種の神器である「八尺瓊玉」と「八咫鏡」などからも「八」の使い方がうかがわれる。このほかにも神武天皇の東征のとき，紀伊能野から大和への道案内をしたといわれる「八咫烏」などがある。このほかにも浦島太郎が八千歳まで生きたということも，古今集の「千代に八千代に…」での「八」もある。

この聖数というものは，種々の儀式や呪術に使われる数であり，その民族にとって神秘的な霊能の感じられ

る数であるとともに「多数」を意味することが多い。[11]

現代では，この「八」は字形が下に行くに従って次第に末広がるということで，次第に繁盛することにもたとえられている。しかし，ことわざでの「八」はおもにプラスの意として使われている。他方，「八」も「七」と同じくマイナスの意として使われる場合がたまにはある。

a) プラスの意を表すもの

◦**八細工**七貧乏

これは「七細工八貧乏」と同じく，なんでもできる人は成功しそうなものだが，そのような人は多芸多能が邪魔して，かえって成功せず貧乏することが多い。

◦朝寝**八石**の損

朝寝坊する者は，何事につけても損失が多いという戒め。

◦夜声**八町**

夜は声や音が遠くまで聞えるということ。

◦四斗を**八斗**

ちょっとのことを大きく言ったりおおげさに考えたりすること。

b) マイナスの意を表すもの

◦**八つ子**も癇癪

小さい弱い者にも，それ相応の意志や考えがあるから，侮ってはいけないということ。

◦物は**八分目**

少し足りなめがよいということ。

6.〈九〉

「九」は周易での「陽」の数(一，三，五，七，九)の中で至極の数である。すなわち，「慶賀すべきめでたい最高のもの」の意を含んでいる。ギリシャの哲学者ピタゴラスの説では，「三」は「trinity」(三位一体)なので完全な統一を示し，三の三倍は，すなわち「九」は，完全な複数「Perfect Unity」を示すといっているそうである。[12]

いっぽう，日本のことわざでの「九」は，ほとんどがプラスの意に使われている。

a) プラスの意

◦**九牛**の一毛

九頭の牛の中の一本の毛ということで，大多数の中のごく少数，あるいは，比較できぬ程些細なことをたとえていう。

◦**九死**に一生を得る

ほとんど助かる見込みのない命がかろうじて助かること。「万死に一生を得る」ともいう。

◦**九**仞の功を一簣に虧く

多年の努力も終りぎわのわずかな失敗で不成功となる。

◦薬**九層倍**

薬の価は原価に比べてべらぼうに高い

7.〈十〉

人間が数をかぞえる方法はほとんどが，人間の手に指が十本あるという事実からヒントを得て考案されたという。たとえば，アメリカ・インディアンのズニ語では「十」を表す時には「手の指全部」という意味の言葉を使う。[13]

「十」は十本の指の全部だから，すべて，あらゆる，たくさんなどの意として使われることが多い。

(11) 大野晋，日本語をさかのぼる，p112，岩波書店，1979.
(12) 関聖泓，平安朝の文学作品に見える比喩表現について，日語日文学研究第四集，1983.
(13) 前掲書，ペルリッツの世界言葉百科，p88.

a) プラスの意を表すもの

◦**十目**の見る所十手の指す所

多くの人の見るところ考えるところは間違いないものだということ。

◦**十遍**探して人疑え

物が紛失したときでも，何度も探したうえで，はじめて疑うべきである。

◦非力**十倍**欲力五倍

日ごろは力の弱い者でも，すわ一大事という時，または，欲のためには，いつもよりずっと多くの力を出すことができる。

◦**十人**寄れば**十国**の者

大勢集まると，それぞれ生国も性格も違う。

8.〈百〉

「百」は多くのもの，いろいろなもの等，大半がプラスの意として使われている。一般的に使っている単語の中で，百貨店，百科事典などからも「百」の意がうかがえる。しかし，「百」はマイナスの意として使われることもある。

a) プラスの意を表すもの

◦**百貫**の鷹も放さねば知れぬ。

高い金を払って買った鷹も，鳥を捕らせてみなければ，働きがあるのかないのかわからない。

◦三つ子の魂**百**まで

幼いときの性質は，年をとっても変らないということ。

◦可愛さ余って憎さが**百倍**

可愛いと思う心が強いほど，いったん憎いとなれば，その憎しみもなみなみではない。

◦**百日**の説法屁一つ

長い間の苦労がちょっとした失敗ですっかりぶち壊されてしまう

b) マイナスの意を表すもの

◦**百**で買った馬のよう

安物の馬のように寝てばかりいて一向に役立たぬこと。

9.〈千〉

「千」も「百」と同じく，おもに，プラスの意として使われていることが多い。たとえば「千貫」は重いことと価値の高いことであり，「千言」はたくさんのことば，「千石」は多くの米，「千疊」は山が幾重にも重なりあっていること，「千仞」は極めて高く，または深いことなどをいう，古今集の「わが君は千代に八千代にさざれ石の巌となりて苔のむすまで」での「千代」「八千代」は両方とも非常に長い年をいう。

「千」のはいっていることわざは，ほかの数，つまり，「一，百，千，万」と対をなしているものが多い。「千」は，「一」または「百」と対をなしてはプラスの意に，「千」と対をなしてもやはりプラスに，「万」と対の形をとっては，プラスの意に使われている時もあるし，マイナスの意に使われている時もある。

a)「一」と対の形をとるもの

◦親の意見と茄子の花は**千**に**一つ**も仇はない

茄子の花はむだ花がなく，咲けば必ず実になる。それと同じように親の意見も全くむだや間違いがなく，すべて子供のためになる。

◦**千貫**のかたに編笠**一蓋**

多額の貸し金に対するかたに，わずかなものをとる。

◦**千羊**の皮は**一狐**の腋に如かず

羊千匹分の皮でも狐一匹の腋の下からとった高価な皮には及ばないということ。

b)「百」と対の形をとるもの

◦朝起き**千両**夜起き**百両**

早起きして働くのは夜遅くまで仕事をするよりも得だということ。

c)「千」と対の形をとるもの

◦仏**千人**神**千人**

世の中には善人も数多くいるということ。

◦海に**千年**河に**千年**

長い間浮世のさまざまな苦しい経験を積んで，悪賢くて一筋縄ではいかない者のことをいう。

d)「万」と対の形をとるもの

◦目元**千両**口本**万両**

美人の形容で，美人は目元が美しく口元がかわいらしい。

◦鶴は**千年**亀は**万年**

長命でめでたいこと。

◦**千石**も**万石**も米五合

千石万石の大名・小名でも，一日に食べるのはせいぜい五合で，普通の人と変らないというのである。

上述のように「千」はいずれもプラスの意として使われているが，「誉め人千人悪口万人」(世の中には人をほめる者は少なく，悪口を言う者が多い)に限っては「千」がマイナスの意として使われることもある。

10.〈万〉

「万」も「百」または「千」より，もっと度合いを強めて，数の非常に多いこと，ひいては，「すべて，ことごとく，万事」などの意を有していることが多い。つまり，「万」はすべてがプラスの意として使われている。

a) プラスの意を表すもの

◦一将功なりて**万**骨枯る

一人の将軍がはなはだしい手柄を立てるかげには戦場に散って骨となった多くの兵卒の犠牲がある。

◦一犬影に吠ゆれば**万犬**声に吠ゆ

一匹の犬がなにかのひょうしに吠えだすとほかの犬がそれを聞いてみな吠えるということ。

◦**万事**休す

ある事態に直面してそれに対する策が全く立たない場合や，失敗して取り返しがつかない場合に用いられる。

11.〈その他〉

これまで例をあげてきた十種類以外にも，多くの「数詞」があるが，「百」未満の「数」の大半は「年齢」または「日数」に関するものである。では，ここでまず「年齢」と「日数」に関するものを調べて見る。

a) 年齢に関するもの

◦人は**十**歳木は一丈

◦総領の**十五**は貧乏の世盛り

◦**二八**余りは人の瀬越し

◦親の**十七**子は知らぬ

◦鬼も**十八**番茶も出花

◦**二十**後家は立つが**三十**後家は立たぬ

◦人の長は**二十五**の曉まで伸びる

◦**二十五**が済みや入日に向かう

◦うかうか**三十**きょろきょろ四十

◦**三十**の尻括り

◦**三十九**じゃもの花じゃもの

◦人の意見は**四十**まで
◦人生わずか**五十年**
◦手**六十**
◦女房の悪いは**六十年**の不作
◦**七十**の三つ子
◦**八十**の手習い
b) 日数に関するもの
◦腹**二十日**眼**十日**
◦今まいり**二十日**
◦流行事は**六十日**
◦よきもあしきも**七十五日**
◦人のうわさも**七十五日**
◦初物**七十五日**
◦女房**百日**馬**二十日**

他方，「年齢」と「日数」とは関係のない「数詞」のはいっていることわざをプラスの意とマイナスの意に大別して見よう。

a) プラスの意を表すもの。
◦堪忍**五両**
◦**五両**で帯買うて三両でくける
◦**五重**の塔も下から組む
◦呉服**五層倍**
◦**五里**霧中
◦秋の空は**七度半**変わる
◦子を持てば**七十五度**泣く
◦物には**七十五度**
◦**四百四病**より貧の苦しみ
◦袖の振り合わせも**五百生**の機縁
◦雁は**八百**矢に三本
◦**八百八**商売
◦身過ぎは**八百八**品
◦白髪**三千丈**
◦**千万人**と雖も吾行かん
◦西の国で**百万国**も取るよう
b) マイナスの意を表すもの
◦**四斗**を八斗
◦**五斗米**のために腰を折る
◦千石も万石も米**五合**
◦末始終より今の**三十**
◦後の百より今**五十**

V. 助数詞の使い方

ことわざでの助数詞の種類は，「数詞」の種類に引けをとらないほど豊富である。助数詞は言葉その通り，「数

詞」の概念をとるのに役立っている。

ことわざでの助数詞の特徴としては，和語よりは漢語の方が圧到的に多いし，重さ，長さ，または広さなどを表す単位はすべてが尺貫法によるものであり，メートル法によるものは一つもないので，メートル法と役が明るくなる今日ではあまりピントこなくなる点がなくもない。それでは，ここでとりあえず助数詞を，長さを表すもの，体積を表すもの，金銭を表すもの，日数を表すものなどに分けて見る。

1. 長さを表すもの

a) 寸

◦下種の一**寸**

◦人の一**寸**我が一尺

◦一**寸**の虫にも五分の魂

◦三**寸**の舌に五尺の身を亡ぼす

◦三**寸**俎板を見ぬく

◦のろまの三**寸**馬鹿の明け放し

b) 尺

◦わが身の一**尺**は見えぬ

◦水は三**尺**流れれば清くなる

◦三**尺**去って師の影を踏まず

◦秋の雨が降れば猫の顔が三**尺**になる

◦三寸の舌に五**尺**の身を亡ぼす

c) 丈

◦人は十歳木は一**丈**

◦千**丈**の提も蟻の一穴から

◦白髪三千**丈**

d) 里

◦惚れて通えば千**里**も一**里**

◦酒屋へ三**里**豆腐屋へ二**里**

◦朝茶は七**里**帰っても飲め

◦春の晩飯後三**里**

このほかにも，

◦九**仞**の功を一簣に虧く

◦夜**市**八**町**

◦二**間**の間で三間の槍使う

での仞，町，間などがある。

2. 体積を表すもの

a) 合

◦一**合**取っても武士は武士

◦千石も万石も米五**合**

b) 升

◦一**升**の餅に五**升**の取粉

c) 斗

◦四**斗**を八**斗**

◦五**斗**米のために腰を折る

d) 石

◦千**石**も万**石**も米五合

◦千**石**取れば万**石**羨む

◦西の国で万**石**も取るよう

3. 金銭を表すもの

a) 厘

◦会えば五厘の損が行く

b) 文

◦一**文**吝みの百知らず

◦一**文銭**で生爪はがす

◦二束三**文**

◦早起きは三**文**の徳

c) 銭

◦一**銭**を笑う者は一**銭**に泣く

d) 両

◦早起き三**両**倹約五**両**

◦堪忍五**両**思案十**両**

◦生き二**両**に死に五**両**

e) 金

◦千**金**の子は市に死せず

◦千**金**を買う市あれど一文字を買う店なし

f) 貫

◦裸一**貫**(裸百貫)

g) 無表記

◦触り三百

◦後家育ちは三百安い

◦百で買った馬のよう

無表記の場合はいずれも「文」として考えてもよい。

Ⅵ. 同じ意味を持つ類諺

ある特定の状況や場などを表す慣用的な表現は民族が違い，風土が異なれば，比喩はさまざまであるが，論理には想像以上の一致が見られるのである。それはやはり人間に共通する心理があるからであろう。

たとえば，日本で「噂は一時あれこれ世人の口にのぼっても，しばらくすると自然に忘れ去られてしまうもので，長続きしないものだ」という意の「人の噂も七十五日」ということわざがある。これにあたる英語のことわざとしては「A wonder lastes but nine days」(人の驚異もせいぜい九日)をあげることができる。

英米ではこのように数の多いことを示すのに「nine」を使っている。同じ発想から出たことわざであっても表現は異なっているから両国語の「数詞」のとりかえはきかない。それと同じことが自国語内でも言える。

しかし，日本では「人の噂も七十五日」に当るものに「人の上も百日」ということわざがある。このようにことわざには表現はさまざまであるがことわざの価値を深く印象づけようとしている点は共通している「類諺」というものがある。ここでは，ことわざの中で「数詞」または「助数詞」の違いにもかかわらず同じ意味を有することわ

ざを整理してみる。

- 早起きは**三文**の徳
- 早起き**三両**倹約**五両**
- 早起き**五両**
- 早起き**千両**

- 人に**一癖**
- 無くて**七癖**
- 人に七癖我が身に**八癖**

- 三つ子の心**六十**まで
- 三つ子の知恵が**七十**まで
- 三つ子の根性**八十**まで
- 三つ子の魂**百**まで
- 三つ子の心**百**まで
- 雀**百**までおどり忘れぬ

- 悪妻は**六十年**の不作
- 女房の悪いは**六十年**の不作
- 悪妻は**百年**の不作
- 悪妻は**一生**の不作

- 裸**一貫**
- 裸**八貫**褌一貫
- 裸**百貫**

- 借りる**八合**なす一升
- 借りて**七合**なす八合

- 隣の馬も借りたら**一日**
- 隣の馬も借りれば**三日**

Ⅲ. おわりに

ことわざは短いながらも，さまざまな修辞法を用いてその効果を高めている。つまり抽象的な比喩表現を通して意味をより具体化するというべきである。そして，その表現は，民族が違い，環境が異なれば，発想の違いで異なることが多い。

日本のことわざの表現において，他の外国語と比べて目立つのは「数詞」に依る比喩表現が多いばかりでなく，その種類もまた豊富である。したがって日本のことわざの比喩表現を正しく理解するためには，日本人の「数」に対する発想と表現を正しく知っておくべきである。

現代人は昔の人間と「数」に対する感覚も違う上に，生活環境の発展とか，寿命の延長などが昔とかなり変ったので比喩表現として使われている「数」を昔の人とまったく同じ感覚でことわざをとらえることは不可能である。

「数詞」のはいっていることわざの解釈には，文法や語彙の知識のみでは解決がつかない。さらに「助数詞」までくわわっているので，これらの諸点を正しく身につけていないと，「数詞」のはいっていることわざの不自然な使用をあえて行う恐れがあるので注意したい。

最後にこれまでの話を整理して見ると次のようになる。

1) 日本のことわざの中で「数詞」の出てくることわざの占める率は，調査総数約5,000のうち，654に達して，全体の約一割強を示している。これは「日英ことわざの語彙調査」で，言語の違いにもかかわらず，大部分の語彙の分布はかなり似ておるが，「数詞」に関する率だけは日本語の方がよけいに多かったのと相通じる。

2) ことわざの中の「数詞」の数ばかりでなく，その種類また豊富で42種にものぼる。その42種を使用頻度から見た時は，「一」のように200近くのことわざに出るものもあれば，たった1回しか出ていないことわざも12種ある。これらの「数詞」の中，出る頻出度の高い「数詞」は，「十」未満の「数詞」の中では「一，三，五，七，九」の「陽」の数，「十」以上の「数詞」の中では，「十，百，千，万」などの区切りをつける「数詞」が目立つ。そして，1回しか出てこない「数詞」はたいてい「年齢」とか「日数」を表すのに使われる場合が多い。

3) 「一」から「九」までの「陽」の数は，中国の周易・陰陽五行説などの影響を受けて，めでたい「数」であると同時に「大きい」「多い」「長い」「高い」などのプラスの意を持つ場合が多い，しかし「二」は「陰」の数ではありながら陰陽二元説によってプラスの意として使われる場合が多い。

4) 「数詞」の出てくることわざは，ほとんどが比喩に富む表現であるから，「助数詞」または，対をなしている句などの数ともよく調べた上で意味を弁別しなければならない。

5) 「助数詞」の中，度量衡の単位は「尺貫法」にできており，メートル法に依るものは一つもない。

6) 外国のものという意識はまったくなしに使われていることわざの中には中国起源のもの，ひいては西洋起源のものまであるが，いずれも「数詞」の意味から見れば，日本のものと同じく一貫性をたもっている。

7) ことわざの中で，「年齢」「日数」を表す「数詞」をのぞくほとんどの「数詞」は「プラス」または「マイナス」の強調表現として使われている。

8) 「数詞」のはいっていることわざは，ことわざの意味を深く印象づけようと強調の比喩表現として使われている。なお，ことわざの「数詞」には，ほかの「数詞」と取替えのきくものがある。つまり「類諺」というもので，「数」の違いにもかかわらず同じ意味を有するのである。

これまで「日本のことわざの中の数詞」を「ことわざ辞典」(折井英治編，集英社，1982)を中心にして調べて見た。本稿では日本のことわざだけを考察したが，次回には韓国のことわざとの比較研究もして見たい。

参 考 文 献

芦田孝昭，中国の故事・ことわざ，社会思想社，1984.

大野晋，日本語の起源，岩波書店，1979.

大野晋，日本語をさかのぼる，岩波書店，1979.

北村孝一，ことわざの雑学，大陸書房，1984.

金田一春彦，日本語の特質，日本放送出版協会，1983.

久世善男，日本語雑学百科，新人物往来社，1978.

土井忠生編，日本語の歴史，至文堂，1980.

外山滋比古，ことわざの論理，東書選書，1981.

野元菊雄，日本語の性と数，「言語」76，1978.

林大，図説日本語，角川書店，1982.

藤堂明保，漢字と文化，徳間書店，1976.

藤原明，日本語はどこから来たか，講談社，1981.

芳賀綏，社会の中の日本語，大修館書店，1977.

森睦彦，名数数詞辞典，東京堂出版，1980.

閔聖泓，平安朝の文学作品に見える比喩表現について，「日語日文学研究第四集」，1983.

ベルリッツ，ベルリッツの世界言葉百科，新潮選書，1983.